

高齢者対策特別委員会 研修会報告書

墨田区議会基本条例（平成30年墨田区条例第46号）第22条第2項の規定により開催した高齢者対策特別委員会における研修会について、下記のとおり報告する。

令和7年10月9日

墨田区議会議長

佐 藤 篤 様

高齢者対策特別委員長

たかはしのりこ

記

1 開催日時

令和7年9月9日（火） 午後2時00分から午後3時38分まで

2 開催場所

第2委員会室

3 出席委員氏名

たかはしのりこ	中 村 あきひろ	小 林 しょう
船 橋 けんご	井 上 裕 幾	甲 斐 まりこ
はねだ 福 代	山 下 ひろみ	しもむら 緑
福 田 はるみ		

4 講師等氏名

東京大学高齢社会総合研究機構客員教授
秋 山 弘 子

5 目的

高齢者支援についての講演を聴き、質疑及び意見交換を行うことにより、調査事項に関する委員の見識・理解を深める。

6 講義の内容

「長寿社会に生きる」

7 概要

別紙のとおり

研修会概要

1 高齢者支援についての講義等

東京大学高齢社会総合研究機構客員教授・秋山弘子氏から、別添資料に基づき高齢者支援についての講義を受けた後、質疑及び意見交換を実施した。

<質疑及び意見交換の概要>

◎委員（中村あきひろ）

社会関係資本、ロバート・パットナムのマイナスの要素じゃなくて、年代のステージによって再編していくという観点から、地域の実装に向けた柏市、鎌倉市の事例がある。柏市については、在宅医療と介護の社会実装をされて、鎌倉市のリビングラボについては、住民と三井住友、あと東京大学と、秋山先生はセオリーからアウトカムからいろいろやられていると思うんですけども、医療のレセプトの結果とかで、どれぐらいの成果が上がったのか、あと社会実装をするためにどれぐらいの費用、時間を要したのかという点教えてください。

あと、鎌倉市のリビングラボに関しては、コレクティブインパクトの用途でやられたんでしょうか。共通のアジェンダでやっていったのかなという感じがしたんですけど、その要素、社会実装について伺いたいのと、今後、東京 23 区で社会実装をやるとしたら、どんなことをやっていくべきかということについて、東京都は 1,300 万人ぐらいの人口で、高齢者の医療費とか、社会保障費の減免とか、生きがいとか、いろんなところに関わってくると思うので、その辺を先生から伺いたいと思います。

◎東京大学高齢社会総合研究機構客員教授（秋山弘子）

要するに東京都と、柏市と鎌倉市がどう違うか。あんまり変わらないと思いますよ。

特に介護については、今日お話しする時間はありませんですけども、成果の本が出ています。東大出版から本が出ていますので、それをご覧になると、実際に何をやったかということと、どういう成果があって、それからこれをどうすればいいかというマニュアルがわかります。本当にみんなばらばらだったことを一つずつワークショップなんかやってまとめていったんですけども、そういう過程も参考にさせていただいたらいいかなと思います。

それぞれのプロジェクトで結構本を出しています。マニュアル的な。医療費を減らすということは、やはり健康を維持するというのが一番なので、フレイル予防もすごく大きなプロジェクトで、最近テレビによく出る飯島先生が引っ張っていらっしゃるんですけども、全国にフレイル予防の運動を広めている。それから、就労もそうなんです。就労はそういう労働力を供給するだけじゃなくて、健康にも非常にいい。ただ、精神的とか身体的な健康にもいいんじゃないかということが例えば医療費にどれだけ響いてきたかというのは、少し時間が掛かります。今データを集めているところです。

◎委員（中村あきひろ）

柏市に関しては、医療費とかそういったところは、まだ調査しているということです。鎌倉市については社会実装として、住民から主体的にいろんな課題解決を結び付けていくということで、どれぐらい時間が掛かったのか、費用が掛かったのかというところを教えてください。

◎東京大学高齢社会総合研究機構客員教授（秋山弘子）

その辺、重要ですよ。

鎌倉市の場合ですけども、まず、産官学民の四つのステークホルダーで協働体制ができるのに 2 年掛かりました。初めは、副市長も一緒に、市の職員と一緒に町内会の人たちと会ったとき、何を言ったら何も反応しないで、6 か月もほっといて、今頃手土産も持たないで何しに来たって言われたんですよ。

それからは市役所から言うと、私には言わないけれども、もう要するに市民というのはクレマー集団だと思う。だから、なるべく近寄らないほうがいいと思っている。そういう節も見えたわけ。初めから全然もう協働体制がなかったし、企業が入っていくと、何かいいこと言っているけ

れども、本当のアジェンダは違うんだらうという、何か不信感というか、そういうところから始まったんですね。

協働体制、お互いに信頼して、お互いリスペクトする、できることできないこと、みんな強みと弱みがあるねみたいなことも含めて理解して、それを受け入れて、みんなでやれば、何かできるということを理解するまでに2年掛かったんですね。

振り返ってみると、その要因は、小さな成果を積み重ねていくということです。オフィスカードを始めたときどうなるかと思ったけれども、みんなでわいわいやって、やったらできたということです。ほかにも小さなプロジェクトがあるんだけど、やはりそういうものの積み重ねによって、協働体制ができて、市役所にはできないことでも、こういった意味があるよねとか、それをうまくみんなで合わせればいいというのがあって、今8年ぐらいたっているんですけども、見えているのは、住民の方がエンパワーされたということです。

そこも一度シャッター街になったんです。八百屋も魚屋も肉屋もベーカリーも花屋もおもちゃ屋もみんな全部閉まっちゃったんですよ。それが、自分たちでできるということになってから、魚屋のときは、クラウドファンディングをやって、それでお金を何か700万円、800万円集めて、改造して、それで鹿児島県の漁港と連携した。それで空輸して、魚屋を始めたんですね。そうしたら八百屋も鎌倉野菜とか何か残っているものを仕入れて売るとか、次はベーカリーができて、たい焼き屋ができて、最近のリタイヤされた方が本当にぼろぼろの店舗を買って改装して、音楽ホールみたいな素敵な内装をして、ピアノを置いて、歩くと音楽が流れてくるような、そういうまちになった。それから、空き家を改修して、小規模多機能をつくるとか、それから、軽度の認知症の方たちに仕事をしてもらうということで、元パン屋だったところがワーキングデイサービスになった。何かそれをみんな住民の人たちができると思っているんですよ。

それで平たいところを借りてテニスコートを自分たちで整地しちゃって、雨が降ったらそこを全部自分たちで手入れして、そこがみんなのたまり場になっている。そこで、何かバーベキューをやったり、いろんなことをやっていて、それから、畑を開墾してそこで大豆を植えて、みそを子どもたちと一緒に作るとかしている。本当によかったことは、住民の皆さんがエンパワーされたことだと思いますね。

でも、時間が掛かりました。それで、お金に関しては、私たち大学で、国の研究費を3年間とか取って、それを基に、初めは使った。だけれども、その後はもう実装するということです。

◎委員（中村あきひろ）

エンパワメントされて、計画できる技能が付いて、最初3年間、国の費用が入ったということなんですけれども、その後、皆さんに主体があるとしたら、予算を持っていくわけですか。

◎東京大学高齢社会総合研究機構客員教授（秋山弘子）

多分、今日本で100ぐらいリビングラボがあるんで、それぞれでどういう経営をしているかというのは違うと思いますけれども、私たちの場合は、東大が産学連携で経団連が支援してくださって、要するにサポートというかネットワークがあるんですね。そういう会費収入があるのと、実際にリビングラボを使うときの使用料を頂いているんですね。

それで、ほかのリビングラボと違うのは、参加する人たちを、私たちは生活者のプロだと見ていて、仕事として参加してもらうというふうにやっています。最低賃金に近いんだけど、例えば2時間のワークショップに出てもらって、例えば2,000円のクオカードを用意する。そうすると、まずリクルートしやすいんですね。結局、ボランティア精神の人たちだけじゃなくて、いろんな人がいるじゃないですか。そういう人たちにテストしたいわけなので、そういう意味でも、やはり仕事としてきちんと責任を持って関わってもらう。今、それで住民のNPOができていますね。そこと私たちが契約している。住民をリクルートするとか、場所を設定するとか、それから、テストしてもらって、ちゃんと使っているかどうか、記録しているかどうかみたいなものをきちんとチェックするということをNPOがやっていて、それに対しての報酬を払っているという形で回している。

だから、NPOにとっても収入があるから、それで結構いろんなことやっているみたいです。

◎委員（しもむら緑）

私から2点お伺いしたいんですけども、1点目は個人的興味で、日本人が高齢になっても働きたいと思う一方で、ヨーロッパ等は早期リタイアを目指す方々が多いというのは、こちらはこういったことが背景にあるのかというのを教えていただきたいです。

2点目は、デジタルヘルスケア時代における高齢者の自立的健康管理と社会参加の相乗効果についてお伺いしたいんですけども、2040年にはAI等を活用したデジタルヘルスケアが普及してくるということで、個人の健康状態をリアルタイムで把握し、管理できる時代が到来するかと思います。

同時にデジタルネイティブ世代が高齢者になるということで、テクノロジーを活用した新しい形の社会参加が今までとまた違った形で可能になると考えられるんですけども、このような環境変化を踏まえて、高齢者の自立的健康管理と生産的社会参加を統合したシステムをどのように構築していくべきなのか、また今とは違って、人とのつながりが簡単にできるような時代の中で、医療費抑制ですとか高齢者の生きがい創出を同時に実現する政策的枠組みについて、先生が考える見解をお伺いしたいと存じます。

◎東京大学高齢社会総合研究機構客員教授（秋山弘子）

初めのほうは、あちらの人は、働くということを自分の時間を売るみたいな感覚がある。労働って英語でレイバーですが、お産のときの陣痛もレイバーなんですよ。だから、何かなるべく早く逃げたい、要するに苦痛なんですよ。何かそういう観念があるのね。だから、その辺は感覚がすごく違うなと思います。

日本人が本当に喜んで働くかどうか、それは人にもよると思うんですけども、でも、根本的な何か違うなというのは思います。

それから、2番目はすごく難しい問題です。産官学民で協力して、みんなで知恵を出し合って考えていくことだと思うんですね。おっしゃられるように、これからはそういうデジタル、AIを含めて、すごく大きな役割を果たすと思いますし、先週も三菱電機の人为主体になってワークショップみたいなことをやったんですが、AIの怖い面ということで若い方から高齢の方まで参加者がすごい盛り上がったんですね。漫画みたいなものを使ったりして、上手だなと思ったんだけど、何かそういうことで啓発していく。だから、別に何か技術からいくんじゃないかって、そういうものを理解しながら、それをどう使いたいのか、こんなことフルに使えないのかみたいなものを、住民から吸い上げていくという方向で、いろんな製品やサービスの開発もそうだし、それに伴う政策だとか施策、健康に関するものもつくっていくべきだなというふうに思います。

◎委員（はねだ福代）

長寿社会を生きるということで、やはり就労が生きがいになり、また、それが事業になるということで、人生100年というのは、前向きに生きていくことなんだなと今日改めて認識をさせていただきました。

その上で、私たちのこの委員会というのは、独居高齢者の支援というところで、たくさんの課題を持っておりまして、私の身近に起きたことも含めて、何点かご質問させていただきたいんですが、まず、都市部においては、近所の付き合いというのがなかなかできずに、少なくなってきた、高齢者の孤立が表面に出づらくなっていると感じております。

支援が必要な方を見つけるのに、効果的な方法や工夫があれば教えていただきたいです。

◎東京大学高齢社会総合研究機構客員教授（秋山弘子）

いろんな方法、それこそデジタルを使うというのも可能だと思いますけれども、さっき最後にご紹介したモバイルパークというのは、まさにそれなんですね。いろんなものが来て、いろんな人が来る。小さい公園とか大体みんなが歩いていけるところにあるわけですよ。そうすると、よちよち歩きだった子どもが育っていくという近所の方たちは見ているし、お年寄りが少しずつ衰えていくみたいなのを見ていて、何か来なくなっちゃった、心配する、声を掛けようみたいな、そういうのがソーシャル・キャピタルだと思うんです。そういうようなものを醸成する場として、都市公園を活用していく、そういうふうに形づくっていくということを私たちは目指しているんですね。

孤立は高齢者だけの問題じゃなくて、今若い人の孤立も非常に問題になっていますので、やは

りみんなで近所の人たちが一緒になってお互いに見ている、それとなく気遣っている、もう知っているということですね。いろんな解決があると思いますけれども、そういうことを目指しています。

◎委員（はねだ福代）

これは何日か前にあったことなんですが、実は認知症の奥様と一緒に住んでいらっしゃるご主人がお元気な方だったんですが、奥様がいらっしゃる場所でご主人が突然お亡くなりになった。

奥様はもうご主人がいないと暮らしていけないので、もう帰ってこれない状況になってしまったということなんです。

30年も40年も同じ団地に住んでいらした方なんで、近所の方はもう会えないのかとか、ずっと一緒に踊りをやってきた方とかも、全く連絡が取れない状況になっているんです。これは一例なんですけれども、認知症の方を支えていらっしゃる方がいなくなったら、認知症の方が一人になってしまう。こういった案件が多分区の中でも増えてきていると思うんですけれども、今後どのように対応していけばいいのか、先生のご意見を伺いたいと思います。

◎東京大学高齢社会総合研究機構客員教授（秋山弘子）

認知症というのは、100年も生きていれば大体なるんですよ。だから、別に他人事じゃなくて、自分事として考える必要があると思っていて、そういうときにどうするか。今おっしゃるように、誰かと一緒に住んでいるんだけど、一緒に住んでいた人が先に亡くなるということもあるんですよ。

だから、私はやはり人生設計でもう初めから考えておくというのがすごく必要だなと思っています。それで、いろんな介護施設があるから少し行ってみて、こういうときにはここに行きたいとか、そういうことを決めておく。また、認知症だけじゃなくて、最後のところをある程度行政が責任を持つとか、サービスを提供するみたいなことで、鎌倉市もそうなんです、独り暮らしで亡くなった方のいろいろなことを初めから委託しておけば、それをやってくれるみたいな対応。そういうことも含めて、理想的には認知症になっても今までどおりのところで生活できる暮らしをどうやってつくれるかということなんだけれども、多分限界もあるので、それがなくなるときにはどうするかということは、本人がやはり考えておくということが一番重要だなというふうに私は思いますね。

◎委員長（たかはしのりこ）

～委員長あいさつ～

以上